

小牧実繁の著作目録と著述活動の傾向

柴 田 陽 一

歴史地理学第47巻2号（通巻223号）抜刷

（2005年3月）

小牧実繁の著作目録と著述活動の傾向

柴 田 陽 一

- I. はじめに
- II. 自筆目録の書誌的検討
- III. 小牧の著述活動の傾向
- IV. 小牧研究の新たな課題と留意点
- V. おわりに

I. はじめに

本稿で紹介する資料は、日本における歴史地理学の先駆者であり、戦中には「日本地理学」を提唱したことで知られる小牧実繁(1898年~1990年)¹⁾ 自筆の著作目録「小牧実繁著書講演論文目録」(以下、目録 α と表記する)である。

小牧は1922年に京都帝国大学を卒業し、同大学助手、講師、助教授を歴任した後、小川琢治、石橋五郎に続く地理学教室第3代教授(1938年~1945年)に就任した。戦後は、しばらく公職追放されたが、1952年から滋賀大学教授、さらに同大学学長(1959年~1965年)を務めた。晩年には京都学園大学でも教鞭を執っていた(1969年~1985年)。

彼の著作目録として、『小牧実繁先生古稀記念論文集』所収の「小牧実繁先生著作目録」²⁾ (以下、目録 β と表記する)が既に存在する。しかしながら、目録 β は、表1が示すように、彼の著作を完全に網羅したものとは言い難い。したがって、目録 α をここに紹介することの意義は大きいと考えられる。

表1 目録 α と目録 β 文献収録数の比較

	目録 α	目録 β
戦前 (1922.07-38.10)	1/133	3/104
戦中 (1938.11-45.08)	12/135	2/6
戦後a (1945.09-61.08)	0/76	0/19
戦後b (1961.09-82.01)	0/68	
合計 (冊/本)	13/412	5/129

注 1) 収録数は著書/論文という形で示している。単位は冊/本である。

2) 戦後は、目録 β が扱う範囲までをa、それ以後をbとして分割し表にした。

以下本稿では、II章で自筆目録(目録 α)の書誌的検討を行う。III章では、主に目録 $\alpha \cdot \beta$ を資料として作成した著作目録に基づき、彼の著述活動の傾向を述べる。IV章では、目録のうち特に戦中の部分を用い、小牧研究の新たな課題と留意点を指摘する。V章では全体を総括する。

II. 自筆目録の書誌的検討

目録 α は、筆者が2004年5月末、小牧が生前暮らしていた京都市左京区の自宅で、彼が残した書類を整理している際に発見したものである³⁾。現在、彼の自宅は彼の三男平野健男氏(1933年~)が管理している。目録 α は、茶封筒に入っており、表に「小牧実繁著書講演論文目録 ●昭和以前を含む 但 大正十一年以前を欠く」と墨書されている(図1)。

目録 α は9つ([A]~[I])の部分から成る。

キーワード：小牧実繁、著作目録、地理学史、著述活動、日本地政学



図1 目録α

以下、それぞれの部分について紹介していこう。なお、A～Iの記号は、茶封筒に収められていた順番にしたがって付けた。資料の配置の仕方に小牧の何らかの意向が反映されている可能性もあるからである。

まず、[A]は①京都東ロータリークラブの封筒と、②THE ROTARY FOUNDATION OF ROTARY INTERNATIONALの封筒から成る。①の表には、「ポール・ハリス・フェローに至る経路 ロータリー財団への寄付の記録 昭和五十七年三月十一日 小牧実繁記」とボールペンで記されている。すなわち、[A]は小牧がアメリカのロータリー財団へ寄付をしたことを示す資料である。晩年彼は彦根ロータリークラブや、①の封筒にある京都東ロータリークラブに入会し、ロータリー活動に携わっていた。前者の在籍期間は1959年から1968年、後者のそれは1969年から1988年である。なお、両クラブの月報や会報には彼の書いた文章がいくつか載っている。

次に、[B]は①調査表（日本語）と②調査表（英語）から成る。それぞれ表紙に記述があり、順に「(教)(控)」, 「(公)(控)」である。体裁は日本語と英語を共に書き込まねばならなくなっている点①と異なるが、調査項目は①と同じである。よって、以下①の紹介をすることにする。

①は全16頁の調査表と補助紙（便箋4枚）

から構成されている。まず、調査表の調査項目は次の9項目である。イ 個人的事項（1～2頁）、ロ 学歴、職業及び軍務の履歴（3～4頁）、ハ 団体の会員（5～8頁）、ニ その他の職務履歴（9頁）、ホ 著述及び演説（10頁）、ヘ 法人その他の団体に於ける地位（11頁）、ト 株式等の所有又は支配（12頁）、チ 海外旅行及び滞留（13頁）、リ 備考（14～15頁）。ロ、ハ、チに記載されている情報は、彼を理解する上で重要だと思われるので、別表にまとめた。（順に表2、表3、表4）。

次に、補助紙であるが、これはホの欄外の「補助紙に続く」という記述、さらに補助紙1枚目の「第一〇頁補助紙内容」という記述から分かるように、ホを補うため調査表に添えられたものである。補助紙は、「編纂」したものであるとして、『地理論叢』（京都帝国大学地

表2 職業の履歴

年月日	職業	職務内容
1931.03.31	京都帝国大学助教授	地理学の教授
1938.03.31	京都帝国大学教授	地理学の教授
1939.06.30	学術研究会議会員	地理学部を担当
1945.12.27	依願免本官	
1949.01.08	株式会社三井物産社員	物品販売
1950.11.30	右退社	
1950.12.01	京阪電気鉄道株式会社嘱託	沿線観光地調査

注 資料として[B]を用いた。

表3 所属団体

年月日	所属団体名	役職名
1937.01.01	日本学術振興会	委員
1942.01.01	学術部第六常置委員会	
1943.01.25	大日本言論報国会	理事
1943.08.28	日本諸学振興委員会	地理学部臨時委員
1944.02.23	日本諸学振興委員会	地理学部専門委員
1938.04.01- 1945.12.27	史学研究会	評議員

注 1) 資料として[B]を用いた。

2) 大日本言論報国会の箇所には、「理事会二出席 講演会二回出馬 在任本会解散マデ」という記述あり。

表4 海外旅行及び滞留

年月日	国名	目的
1927.07.25- 1929.10.03	米, 英, 仏, 西, 伊, 独, 白, 和, スイス, チェッ コ, 奥, ユー ゴー, エチオピ ア, 印度洋航路 諸港	文部省より地理学研 究ノ為三ヶ年間独乙 国へ在留を命ぜら れ, 満二ヶ年間在留 一ヶ年間短縮して帰 朝せるもの, 一ヶ年 半フランスに滞在, 半ヶ年間欧米諸国を 旅行す
1932.10.15よ り約1ヶ月	満洲国及中華 民国	文部省より出張を命 ぜられ, 京都帝国大 学文学部地理学専攻 学生を引率見学旅行 す
1938.05.27- 09.24	フランス, オラ ンダ, イギリス, ドイツ, ベル ギー, ポーラ ンド, アメリカ	和蘭国に於て開催の 万国地理学会議に出 席のため, 文部省よ り欧米各国へ出張を 命ぜらる
1939.08.21- 09.16	満洲, 北支, 蒙疆地方	学術研究のため京都 帝国大学より出張を 命ぜられ文学部那波 教授と同行す

注 1) 資料として [B] を用いた。

2) 国名は小牧の表記による

理学教室), 『新世界叢書』(目黒書店), 『世界地理政治大系』(白揚社) が挙げられている2枚目, 「著書」14冊が挙げられている3枚目, 「論文 昭和六年一月一日以降発表の論文全部を手控により作成 一も省略せず但し『日本地政学』『続日本地政学宣言』『日本地政学覚書』ラジオ新書『大東亜の地政学』に収録せるものは重複する訳なる故省略す全部にて百貳拾参篇となる」⁴⁾ という記述がある4枚目から成る。なお, 調査表の本(10頁)の欄に記載されているのは, 講演(9回)のみである。彼の行った講演については, 彼の行った社会的活動を理解する上で重要だと思われるので, 後述の [I] に記載されている情報も参照し表にまとめた(表5)。なお, この調査表及び補助紙は, イの

「就こうとする地位 滋賀大学教授」という記述が示すように, 滋賀大学就職の際の提出書類として作成されたものである。また, 表紙の記述, すなわち「(教)(控)」と「(公)(控)」という記述から, 提出書類の控えだと推測される。作成年月日は1951年8月21日であり, 彼が公職追放を解除された8月6日の直後である。ちなみに, 彼が滋賀大学教授に任命されたのは1952年7月1日である。

[C] は厚い紙を使用して作られた著作目録である。収録範囲は, 小牧が京都帝国大学大学院に入学し, 学界にデビューした1922年から1937年1月までである(論文130本)。

[D] は①便箋4枚と, ②便箋4枚で構成されている。①は1枚目右端に「小牧実繁業績表」という記述があり, 1~3枚目に論文(50本, 1922~1937年), 4枚目に著書(8冊)が記載されている。収録された著作は, 論文は[C]と, 著書は[E]と同じものである。②は1枚目に海外旅行(1927年~1939年), 2~4枚目に職歴(1935年~1947年)が記載されている。職歴については, [B]の①口より情報量が多く, 彼の社会的活動を知る上で有用だと考えられるので表にまとめた(表6)。

[E] は便箋と原稿用紙を使用して作られた著作目録である(便箋14枚と原稿用紙25枚)。収録範囲は1937年1月から1945年7月までである(著書13冊, 論文141本)。[C]の著作目録に記載された最後の文献と[E]に記載された最初の文献は同じのものである(後掲表7中の(133), 以下番号のみを記す)。(D)が[C]と同じ範囲を収録したものだったのに対し, [E]は[C]の続編という性格を持つ。

[F] は数種類の便箋を使用して作られた著作目録である(便箋34枚)。収録範囲は1949年3月から1976年12月までである(論文130本)。すなわち, [F]は[E]の続編という性格を持つ。

[G] は便箋10枚を使用して作られた著作目

表 5 講 演

年月日	演題（場所、その他の注記）	演説の梗概	演説の目的 （依頼元）	聴衆数及び 聴衆の種類	後援機関名
1938.12.12-14	蒙疆事情（京都放送局より全国中継放送）		（放送局の依頼による）		
1939.05.17	我国科学界の先駆者（3）伊能忠敬（京都放送局より全国中継放送）		（放送局の依頼による）		
1940.04.16より1週間	近世探険史（京都放送局より全国中継放送）		（放送局の依頼による）		
1940.11.07-09	歴史地理学（於文部省）	歴史地理学の本質を明かにす	地理学の進歩向上を目的とす	約400名 研究者 教 員	日本諸学振興委員会
1941.05.20-21	東亜の地政学（於興亜錬成所）		（興亜錬成所の依頼）	約100名 同所生	
1941.10.20	太平洋の地政学（京都放送局より全国中継放送）		（放送局の依頼による）		
1942.01.27	日本地政学に就いて（於大阪）	日本地政学の説明	依頼に応じ啓蒙の為	約100名 倶楽部員	大阪学士会倶楽部
1942.02中1週間	大東亜の地政学（東京放送局及京都放送局より全国中継放送、ラヂオ新書第96冊として出版 約8000部を出す）		（放送局の依頼による）		
1942.03.25	南方の地政学（於京都市公会堂）	南方の地政学的説明	依頼に応じ啓蒙の為	約300名 市 民	京都市文化課主催
1942.04.11	地政学上より見たる独ソ戦（於大阪）	独ソ戦と大東亜戦との展望	依頼に応じ地政学的見方の説明	約200名 会 員	大阪帝国大学医学部学友会
1942.11.04-05	南方の地政学	地政学的説明	依頼に応じ啓蒙の為	約200名 市 員	文部省・京都帝大共催
1942.12.02	大東亜共栄圏の理念（於大阪）	共栄圏の正しき理念を強調	依頼に応じ啓蒙の為	約100名 教 員	大阪市国民学校教育研究会
1943	思想戦と地政学（於京都新聞会館）	思想戦なるものを地政学の方面より見る	依頼に応じ地政学を以て報国せんとす	約300名 市 民	大日本言論報国会「思想戦大学講座」
1943.01.20-02.05	大南方地政論（太平洋書館より刊行 約5000部）		（大阪毎日新聞社の依頼による）	約300名	大阪毎日新聞主催「大南方研究講座」
1943.03	大東亜の理念（於金沢）	真に正しき大東亜の理念を強調す	依頼に応じ国民を正しきに導かんとせり	約400名 市 民	大日本言論報国会「思想戦大講演会」
1943.11.25	皇国日本の地政学（於東京女高師）	日本の地政学的地位を独乙にあらざる日本の地政学より明らかにす	依頼に応じ国民を正しきに導かんとせり	約500名 学校教員 生 徒	日本諸学振興委員会公開講演会
1945.03.11	大いなる神州のみそぎはらひ（於京都新聞会館）			約100名	孝明天皇加茂行幸攘夷御祈願記念講演会

注 1) 資料として〔B〕及び〔I〕を用いた。〔I〕から得たデータには太文字にしている。

2) 項目は〔B〕に従った。「演説の目的」の項目では、〔I〕からは依頼元を示すデータを括弧に入れ記入した。

表 6 職 歴

年月日	職名など	機関名
1935.04.01	立命館大学専門学部文学科講師嘱託	立命館
1935.06.29	日本経済地理学会参与二推薦	日本経済地理学会
1935.10.01	日本経済地理学会理事	日本経済地理学会
1935.10.14	教員検定委員会臨時委員被仰付 (1937.03.12被免)	内閣
1936.12.17	高等学校高等科教授要目改正委員ヲ嘱託ス	文部省
1937.01.01	日本学術振興会学術部第六常置委員会委員ヲ嘱託ス	日本学術振興会
1937.11.12	地理学本邦委員委嘱	学術研究会議
1939.02.03	京都府史蹟勝地保存委員会委員	
1939.06.30	学術研究会議会被仰付	内閣
1940.04.22	「日本文化と京都」大展観委員嘱託	京都市長 市村慶三
1940.09.13	教員検定委員会臨時委員被仰付	内閣
1941.02.22	資源科学諸学会聯盟地理学部会委員 (会長 鷹司信輔)	
1941.07.01	大阪地理学会顧問	
1941.08.13	師範学校教授要目調査委員ヲ嘱託	文部省
1941.08.21	京都帝国大学陳列館防火消毒係長依嘱	
1941.09.11	人文科学研究所協議員委嘱 (1943.02.28依頼解嘱)	
1941.09.30	京都帝国大学報国隊文学部隊附委嘱	京都帝国大学
1942.01.01	日本学術振興会学術部第六常置委員会委員委嘱	日本学術振興会
1942.04.06	日本諸学振興委員会昭和十七年度歴史学部臨時委員嘱託	文部省
1943.01.25	大日本言論報国会理事二任ズ	同会会長 徳富猪一郎
1943.08.28	日本諸学振興委員会昭和十八年度地理学部臨時委員嘱託	
1944.01.13	昭和十八年度文部省視学委員嘱託	文部省
1944.02.23	日本諸学振興委員会昭和十八年度並昭和十九年度地理学部専門委員ヲ嘱託	文部省
1946.11.20	裁定 文官一時恩給 給与金額 五千五百貳拾八円也	
1947.11.30	日附官報号外 中央公職適否審査委員会ニ於テ追放仮指定	大日本言論報国会

注 資料として〔D〕を用いた。

録である（文字が書いてあるのは6枚）。収録範囲は1977年2月から1982年1月までである（論文15本）。すなわち、〔G〕は〔E〕の続編という性格を持つ。

〔H〕は①滋賀県神社庁の封筒と、②便箋12枚で構成される。①の封筒の中身は、小牧に滋賀県神社庁報への原稿執筆を依頼する趣旨の手紙である。②は手書きの原稿であるが、内容からして「可愛い犬の子との不思議な縁」（454）の原稿に当たるものと考えられる。

〔I〕は次のものがビニールの紐で束ねられている。①便箋1枚を使用して作られた著作

目録（著書8冊）、②便箋2枚を使用して作られた講演リスト（講演10回）、③便箋2枚を使用して作られた講演リスト（講演10回）、④便箋13枚を使用して作られた著作目録（論文65本、1931年～1937年）、⑤便箋19枚を使用して作られた著作目録（論文84本、1940年～1945年）、⑥便箋3枚を使用して作られた講演リスト（講演12回）、⑦便箋2枚を使用して作られた著作目録（著書13冊）。⑤は1枚目に「論文 続き（戦時中のもの） 滋賀大学へ貸す」という記述がある。なお、最後の1枚は公職追放が解除されたことを示す資料である⁵⁾。

以上を総合すると、目録αは次に述べるよ

表 7 小牧実繁著作目録 (目録 γ)

①戦前 (1922.07-1938.10)

- (1) 1922.07-08 砂丘と聚落. 歴史と地理, 10(1)-(2)
- (2) 1923.09-11 十六島湾沿岸の土地と住民. 歴史と地理, 12(3)-(5)
- (3) 1924.06 地理学者としてのカント. 地球, 1(6)
- (4) 1924.11 河北潟附近の地理. 地球, 2(5)
- (5) 1925.01 最近に於ける北陸海岸線の移動. 地球, 3(1)
- (6) 1925.01 出雲の沖積海岸. 地球, 3(1)
- (7) 1925.03&05 中世回教徒の地理学. 地球, 3(3)&(5) α
- (8) 1925.07 阿波の隆起海岸. 地球, 4(1)
- (9) 1925.07 加奈陀に於ける氷河の研究. 地球, 4(1) α
- (10) 1925.07 西班牙諸港の変遷. 地球, 4(1) α
- (11) 1925.09 古代四国の聚落到就いて. 地球, 4(3)
- (12) 1925.09 長門峡の成因. 歴史と地理, 16(3)
- (13) 1925.10 笠山雜観. 地球, 4(4)
- (14) 1925.10 古代太平洋沿岸の植民と日本海流とに就いて. 地理教育, 3(1)
- (15) 1925.11 北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告. 民族, 1(1)
- (16) 1925.11 歴史地理学に関する私見. 歴史と地理, 16(5)
- (17) 1925.12 匈牙利に於ける聚落の形式. 地球, 4(6) α
- (18) 1926.01 淡路の海岸. 地球, 5(1)
- (19) 1926.01-04 日本海沿岸石器時代遺跡の地理学的考察. 史林, 11(1)-(2)
- (20) 1926.02-03 北越海岸砂丘所見. 歴史と地理, 17(2)-(3)
- (21) 1926.03 庄内の砂丘. 地球, 5(3)
- (22) 1926.04 先史聚落地理. 地球, 5(4)
- (23) 1926.06.11 河内石灰洞. 京都帝国大学新聞
- (24) 1926.07 パレスティンに於ける旧石器時代遺跡. 民族, 1(5)
- (25) 1926.10 糸満人と其の地理的分布. 地理教育, 5(1)
- (26) 1926.10-11 三角洲上の地理. 地球, 6(4)-(5)
- (27) 1926.10-11 ヴァロー氏の歴史地理学論. 歴史と地理, 18(4)-(5)
- (28) 1926.12 知多半島西岸の一砂丘に就いて. 歴史と地理, 18(6) α
- (29) 1927.01 河内平野の古地理. 史林, 12(1)
- (30) 1927.01 伊太利諸川の三角洲. 歴史と地理, 19(1) α
- (31) 1927.02 ラ・ポール・レ・パンの拋物線状砂丘. 歴史と地理, 19(2) α
- (32) 1927.02-03 古代人類の跡. 人類学雑誌, 42(2)-(3) α
- (33) 1927.03-04 コズロフ探検隊の発見品. 歴史と地理, 19(3)-(4) α
- (34) 1927.06 蒙古の探検. 歴史と地理, 19(6) α
- (35) 1927.07-09 山陰海岸砂丘所見. 歴史と地理, 20(1)-(3)
- (36) 1927.08 那覇市外城嶽貝塚発掘報告 (予報), 人類学雑誌, 42(8)
- (37) 1927.08 地理実習に関する二三の問題. 地理教育, 6(5)
- (38) 1927.10-12&1928.01&02 穴道湖の鹹度問題. 地球, 8(4)-(6)&9(1)-(2)
- (39) 1930.05 先史地理学に就いて. 地理教育, 12(2)
- (40) 1930.07 ラ・キナに旧石器を掘るの記. 歴史と地理, 26(1)
- (41) 1930.08-10 アビシニアの経済地理. 地理教育, 12(5)-(6)&13(1)
- (42) 1930.08 久米島大原の砂丘. 歴史と地理, 26(2)
- (43) 1930.09 東ピレネーの地理的概観. 地理, 創刊号
- (44) 1930.10 先史学史の一節. 小川琢治博士還暦祝賀会編『小川博士還暦祝賀記念論叢』弘文堂書房
- (45) 1931.01 最近に於ける仏蘭西派地理学の発達と其傾向. 歴史と地理, 27(1)
- (46) 1931.03 先史地理研究に就いての二三の考へ. 歴史と地理, 27(3)
- (47) 1931.05 今年九月巴里に開かるべき国際地理学会議. 附 仏蘭西地理学界の展望. 「岩波講座」地理2 β
- (48) 1931.05.08&09.15 民族地理学. 地理学講座第6回配本&第9回配本, 地人書館 S
- (49) 1931.07 久米島見聞誌. 地球, 16(1)

- (50) 1931.07 プリュンの生涯とその学問. 歴史と地理, 28(1)
- (51) 1931.08 郷土地理研究に於ける地理学的基礎的訓練の意義. 地理教育, 14(5)
- (52) 1931.09-10 北京より多倫まで. 地球, 16(3)-(4)
- (53) 1931.10 近江野洲郡の伝承. 郷土研究, 5(5)
- (54) 1931.11 先史人類の生活と環境. 「岩波講座」地理学
- (55) 1931.11 近江野洲郡の民俗. 郷土研究, 5(6)
- (56) 1931.11 中央高原の夏. 地球, 16(5)
- (57) 1931.12&1932.01-03 アビシニア国王に謁するの記. 地球, 16(6)&17(1)-(3)
- (58) 1932.02 西部アルプスに於ける市, 殊に家畜市に就いて. 地理教育, 15(5)
- (59) 1932.04-05 東ピレネーの春. 地球, 17(4)-(5)
- (60) 1932.04 周口店遊記. ドルメン, 1-2
- (61) 1932.06 シャルダン師の印象. ドルメン, 3
- (62) 1932.07 ハイデルベルク人のあとを訪ねて. ドルメン, 4
- (63) 1932.07-09 西班牙紀行. 地球, 18(1)-(3)
- (64) 1932.08 仏蘭西オアザン地方民行商の起原と発達. 地理, 3(3) α
- (65) 1932.08-09 新満洲の民族. 地理教育, 16(5)-(6) α
- (66) 1932.08 ユーゴスラヴィアの旅. ドルメン, 5
- (67) 1932.09 チェコスロヴァキアの旅—ブルノーの驚異—. ドルメン, 6
- (68) 1932.10 伯林博物館めぐり. ドルメン, 7 α
- (69) 1932.11 日本に於ける聚落の高距限度. 地理論叢, 1
- (70) 1932.11 大山博労座のことなど. 地理論叢, 1
- (71) 1932.11 吉野聞書. 地理論叢, 1
- (72) 1932.11 ワイマル郊外の遺跡. ドルメン, 8
- (73) 1932.12 エル・アスツリエンゼ. ドルメン, 9 α
- (74) 1933.01 愛蘭一瞥. 地球, 19(1)
- (75) 1933.04 沿海漁撈民間に於ける人口の分布. 地球, 19(4) α
- (76) 1933.06 万国地理学会議. 地球, 19(6) α
- (77) 1933.06 先史地理 (昭和七年学界展望). 地理学年報, 1
- (78) 1933.06 欧羅巴山地の人口に就いて. 地理教育, 18(3) α
- (79) 1933.08-09 近江野洲郡の民謡. 郷土研究, 7(6)-(7)
- (80) 1933.08 人文地域. 地球, 20(2) α
- (81) 1933.08 マルトンヌの地誌方法論. 地理教育, 18(5) α
- (82) 1933.09 歴史地理学. 「岩波講座」地理学
- (83) 1933.12 日本に於ける聚落の高距限度 補遺. 地理論叢, 2
- (84) 1934.01-02 総合的地理的地域決定法. 地球, 21(1)-(2) α
- (85) 1934.01-02 アルプスの自然的区分. 地理教育, 19(4)-(5) α
- (86) 1934.02 砂丘に関する若干の文献. 「岩波講座」地理学 β
- (87) 1934.04 本邦海岸砂丘固定作業史の断片. 地理論叢, 3
- (88) 1934.04 愛知川上流の村々. 地理論叢, 3
- (89) 1934.06 薩摩国吹上浜砂丘の研究. 地理学年報, 2
- (90) 1934.07 本邦海岸砂丘固定作業史の断片 (第二報). 地理論叢, 4
- (91) 1934.08 有明海沿岸砂丘地域の研究. 地球, 22(2)
- (92) 1934.08 シェルの旧石器時代遺跡. ドルメン, 3(8)
- (93) 1934.09 聚落の一特殊様式を訪ねて. 地理学, 2(9)
- (94) 1934.09 ヘットナー地理学に於ける全体性の概念. 地理教育, 20(6) α
- (95) 1934.09 フォーセツト、英国の自然的区分. 地球, 22(3) α
- (96) 1934.11 ウェールスの旅. 地理学, 2(11)
- (97) 1934.12 畑谷の村々. 地球, 22(6)
- (98) 1934.12 地誌に於ける原因性と現実性と. 地理学, 2(13) α
- (99) 1934.12 本邦海岸砂丘固定作業史の断片 (第三報). 地理論叢, 5
- (100) 1934.12 日本に於ける聚落の高距限度 補遺 続. 地理論叢, 5
- (101) 1935.01 姉川上流の村々. 地球, 23(1)

- (102) 1935.01 英国に於ける湖上住居遺跡. 地理教育, 臨時増刊号 α
- (103) 1935.01 シャンパーニュ紀行. 地理学, 3(1)
- (104) 1935.02 近江カルストの村々, 地球, 23(2)
- (105) 1935.02 一独逸人の見たる仏蘭西の地理学と地図学, 地理教育, 21(5) α
- (106) 1935.02 江北の雪, 風景, 2(2)
- (107) 1935.03 宮峠の南北, 地球, 23(3)
- (108) 1935.04 加賀国大聖寺河口砂丘地域の研究. 地球, 23(4)
- (109) 1935.04&1936.08&10&12 巴里学事暦. 地理学, 3(4)&4(8)&(10)&(12)
- (110) 1935.04 本邦海岸潟湖埋積埋立干拓史の断片 (第一報). 地理論叢, 6
- (111) 1935.06-08 琵琶湖湖上交通の変遷. 地理教育, 23(3)-(5)
- (112) 1935.08 西近江路交通の歴史地理学的考察. 地理教育, 22(5)
- (113) 1935.08-10 日向国海岸砂丘地域の研究. 地球, 24(2)-(4)
- (114) 1935.09.11-18 エチオピア旅行の思出話. 中外日報 α
- (115) 1935.10.01 ハイレ・セラツシエ一世陛下の印象. ダイヤモンド, 23(29) α
- (116) 1935.11 本邦海岸潟湖埋積埋立干拓史の断片 (第二報). 地理論叢, 7
- (117) 1935.11.25 旧石器時代に関する知識の伝流. 小泉荃三編『立命館三十五周年記念論文集』立命館出版部
- (118) 1936.01 人類に於ける気候馴化能力の限界に就いて. 地球, 25(1) 山口丹海と共訳 α
- (119) 1936.01 飛騨の民家風景. 風景, 3(1)
- (120) 1936.02 地誌と一般地理学, 地誌の方法. 地理教育, 23(5) 抄訳 α
- (121) 1936.02 江勢交通路と近江商人. 地理と経済, 創刊号 村松寛と共著 α
- (122) 1936.02 調和景観のために. 風景, 3(2)
- (123) 1936.03.01 近畿地方市町村別人口増減図. 京都帝国大学文学部地理学研究室 安藤經一・大橋英男と共著 β
- (124) 1936.05 江濃国境一山村の研究. 地理と経済, 4 木村憲治と共著
- (125) 1936.05 江北の断層地形と交通路. 立命館文学, 2(5) 村松寛と共著 α
- (126) 1936.06 人文地理学の体系に就いて. 地理教育, 24(3) 抄訳 α
- (127) 1936.08 蘇格蘭の旅. 地理学, 4(8)
- (128) 1936.08 気山津の変遷. 地理論叢, 8
- (129) 1936.09 江若の国境栗柄峠. 地球, 26(3) 木村憲治と共著
- (130) 1936.09.26-27 奥美濃の悲劇. 中外日報
- (131) 1936.10-11 本邦高地聚落の研究 (第一報). 地球, 26(4)-(5)
- (132) 1936.11 三浦御料林の紅葉. 風景, 3(11)
- (133) 1937.01-02 英蘭雜記. 地理学, 5(1)-(2)
- (134) 1937.02. 地理学と民俗学. 近畿民俗, 2(1)
- (135) 1937.03-04 丹後国箱石浜砂丘地域の研究. 地理教育, 25(6)&26(1)
- (136) 1937.04 高月揖斐線山村の観察. 地球, 27(4) 木村憲治と共著
- (137) 1937.04-05 仏蘭西雜記. 地理学, 5(4)-(5)
- (138) 1937.11.16 先史地理学研究. 内外出版印刷株式会社
- (139) 1938.01.31 関東地方市町村別人口増減図. 京都帝国大学文学部地理学研究室 安藤經一・大橋英男と共著 β

②戦中 (1938.11-1945.08)

- (140) 1938.11.05 地理学を志す人へ. 京都帝国大学新聞 (1938.11.03) S
- (141) 1940.01.01-02 上代日本国土の地形. 読売新聞
- (142) 1940.07&09 玉松操先生と江西の勤皇家. 遵義, 5(2)-(3) (1940.07.12) α
- (143) 1940.08.27 近世探検史 (ラチオ新書22). 日本放送出版協会
- (144) 1940.09.30 先史時代の地理的環境. 人類学・先史学講座, 17 藤岡謙二郎と共著 (1940.04.07)
- (145) 1940.10.17 日本地政学宣言. 弘文堂書房 *再版は1941年2月11日, 三版は1941年12月1日に発行されている
- (146) 1940.12. 日本地政学の主張. 地理論叢, 11 (1940.02.05)
- (147) 1941.02.28&03.01 二つの運河ーパナマとスエズー. 大阪朝日新聞 [川上喜代四と共著] α
- (148) 1941.03 歴史地理学. 日本諸学振興委員会研究報告, 11 [日本地政学の主張は大同小異]
- (149) 1941.03.20 支那地理総説. 支那地理歴史大系刊行会編『支那及満洲国現勢地理 (上)』白揚社 島之夫と共著 S
- (150) 1941.04. 南方政策の確立. 日本教育, 創刊号 (1941.02.14) α

- (151) 1941.04.30 国土計画と交通. 京都帝国大学文学部史学科編『紀元二千六百年記念史学論文集』内外出版印刷株式会社 川上喜代四と共著 (1940.06.17&07.17) S
- (152) 1941.07. 日本地政学の主張—皇国策としての—. 現代, 22(7) (1941.06.07) α
- (153) 1941.08. 近江佐目の洞窟遺蹟. 古代文化, 12(8) 直良信夫・藤岡謙二郎と共著 1929年12月の調査 (1941.05.25)
- (154) 1941.08. 日本地政学の構想展開. 政界往来, 12(8) (1941.06.30) α
- (155) 1941.09. 日本地政学の課題. 科学ペン, 6(9) (1941.07.12) α
- (156) 1941.09. ビルマの地位—日本地政学の見地より—. 政界往来, 12(9) (1940.10.28) α
- (157) 1941.09.10 監修の辞. 別枝篤彦『世界地理政治体系4 蘭領印度』白揚社 (1941.03) α
- (158) 1941.09.16-18 日本地政学の見地よりする我が南方政策. 国民新聞 夕刊 α
- (159) 1941.10.20 序. 米倉二郎『東亜地政学序説』生活社 (1941.05.27) S
- (160) 1941.11. 仏印の地政学的意義—日本地政学の見地より—. 現代, 22(11) (1941.10.03) α
- (161) 1941.12.07 座談会 大東亜における白禍を暴く—日本地政学的に見た東亜共栄圏—. 週刊朝日, 12月7日号 (1941.11.10) S
- (162) 1941.12.18&20&22&23&25&27 太平洋の地政学. 東京日日新聞 (1941.12.02) α
- (163) 1941.12.20 研究室の扉を敲く(8) 苦節五年の功なる 日本地政学の意気揚る. 京都帝国大学新聞 S
- (164) 1941.12.28 「大東亜戦争」宣言. 週刊朝日, 12月28日号 (1941.12.14) α
- (165) 1942.01. 太平洋の史的回顧. 海(大阪商船), 12(1) (1941.11.28) α
- (166) 1942.01. 太平洋の地政学. 現代, 23(1) (1941.12.02) α
- (167) 1942.01. 東亜の地政学. 興亜教育, 1(1) (1941.12.04) α
- (168) 1942.01. 地理学維新. 新若人 (1941.11.20) α
- (169) 1942.01.12 探検と地政学. 京都日日新聞 (1942.01.10) α
- (170) 1942.01.13 決戦場「濠洲地中海」全世界の視聴こゝに 列強争覇の南洋. 大阪毎日新聞 S
- (171) 1942.01.20 世界新秩序の構想と大学の使命—地政学の真義究明—. 京都帝国大学新聞 (1942.01.02) α
- (172) 1942.01.26-28 アジアの海太平洋—米英打倒の皇戦—／—米英の生命線を断つ—／—利己主義の総決算—. 朝日新聞(大阪) (1941.12.24) α
- (173) 1942.02. 濠洲地政論—日本地政学の見地より—. 公論, 6(2) (1942.01.12) α
- (174) 1942.02. 南太平洋の地政学—フィリッピンに重点を置いて—. 大洋, 4(2) (1942.01.06) α
- (175) 1942.02. 一九四一年の思ひ出. 文芸春秋, 20(2) (1941.12.14&31) α
- (176) 1942.02. フィリッピンの地理. 文芸世紀, 4(2) (1942.01.06) α
- (177) 1942.02. 世界の根軸日本. 若草 (1941.12.30) α
- (178) 1942.02.08&10&11&13 濠洲の地政学. 中外商業新報 (1942.01.28) α
- (179) 1942.03. 南アジア大陸の地政学. 改造, 24(3) α
- (180) 1942.03. 大東亜海の意義—日本地政学より観たる—. 科学知識, 22(3) 室賀信夫と共著 (1942.02.07) α
- (181) 1942.03. 大アジアの復古維新宣言. 現代, 23(3) (1942.02.08) α
- (182) 1942.03. 日本地政学と太平洋戦. 実業之日本, 45(5) (1942.01.08?) α
- (183) 1942.03. 大東亜の地政学. 政界往来, 13(3) (1942.02.22) α
- (184) 1942.03. アジアの地政学. 理想日本, 1(2) (1942.01.15) α
- (185) 1942.03. 大東亜海の地政学. 時局情報, 6 [大アジアの復古維新宣言と大体同様にして, その一部をなす] α
- (186) 1942.03.03 爪哇—忽必烈の敗史を覆す—アジア復興に歓喜する全島民—. 朝日新聞(大阪) S
- (187) 1942.03.30 北極と南極(世界地理政治大系). 白揚社 α
- (188) 1942.03.30 東亜の地政学(東洋文化叢書). 目黒書店 (1941.05.20-21) α
- (189) 1942.04. 大東亜必勝の強味—日本地政学より観たる大東亜共栄圏—. 大陸科学, 1(4) (1942.02.02) α
- (190) 1942.04. 大東亜の地政学的概観. 地理学, 10(4) (1942.03.08) α
- (191) 1942.04.12 世界の中心日本. サンデー毎日, 4月12日号 (1942.03.16) α
- (192) 1942.05. アラスカ、アリユーション地政論—その自然に重点を置いて—. 公論, 5(5) (1942.04.08) α
- (193) 1942.05. 大東亜の地政学. 新天地 (1942.03.20) α
- (194) 1942.05.25 日本地政学宣言 増補訂正版. 白揚社 *再版は1942年9月20日に発行されている α
- (195) 1942.06. 探検と地政学. 地理論叢, 12 (1941.06.21)
- (196) 1942.06. 西方アジアの地政学的考察. 東亜文化圏, 1(5) (1942.04.15) α
- (197) 1942.06.14 すめらみくに. 週刊朝日, 6月14日号 (1942.05.01) α
- (198) 1942.07. 地政学上より見たる大東亜共栄圏. 昭徳, 7(7) (1942.05.25) α

- (199) 1942.07. 英国は滅亡す. 大和：国鉄奉公運動機関誌, 2(9) (1942.05.31) α
- (200) 1942.07.09-10 濠洲の開拓. 名古屋新聞 (1942.07.02) α
- (201) 1942.08. 濠洲の自然事情. 海を越えて, 5(8) 和田俊二と共著 α
- (202) 1942.08. 北太平洋の地政学. 大洋, 4(8) (1942.07.12) α
- (203) 1942.08. 印度洋の地政学. 綿輪月報, 8月号 [講義筆記] α
- (204) 1942.08.03 南の鳥と北の鳥. 日本読書新聞 (1942.07.23) α
- (205) 1942.09.06 神国日本. 週刊朝日, 9月6日号 (1942.05.01) α
- (206) 1942.09.11-13&16 南阿の地政学的意義. 中外商業新報 (1942.05.12) α
- (207) 1942.10. 大東亜建設の地政学的考察. 現代, 23(10) (1942.09.05) α
- (208) 1942.10. 日本地政学の将来 — 行くべき道と行かざるを得ない道と、理想と現実と —. 政界往来, 13(10) (1942.09.20) α
- (209) 1942.10.04 京都の地政学. 朝日新聞 (京都版) (1942.10.02) α
- (210) 1942.10.08 日本地政学. 大日本雄弁会講談社 α
- (211) 1942.11. 総力戦. 出版普及, 2(11) (1942.10.18) α
- (212) 1942.11. 第三回歴史学会所感. 日本諸学, 2 α
- (213) 1942.11.25 続日本地政学宣言. 白揚社 *再版は1943年9月20日に発行されている α
- (214) 1942.12. 十二月八日、速かに禍根を除け. 新天地 α
- (215) 1942.12.03 あの日の感銘と決意. 東京新聞 (1942.10.17) α
- (216) 1942.12.10 地政学上より見たる大東亜 (ラヂオ新書96). 日本放送出版協会 (1942.02.23-28) α
- (217) 1942.12.10 南方の地政学. 京都市教育局文化課編『南方講座』京都市役所 (1942.03.25) S
- (218) 1942.12.17 大東亜経済の理念. 東京新聞 (1942.12.07) α
- (219) 1942.12.18 世界に於ける日本の地位. 農大新聞 α
- (220) 1942.12.20 歴史を創る日 — 甦る去年の今日の感激 —. 週刊朝日, 12月20日号 (1942.12.08) α
- (221) 1943.01.01 太平洋のみそぎ. 京都新聞 (1942.12.29) α
- (222) 1943.01. 皇国を讃ふ. 新天地 α
- (223) 1943.01.02&04-05 稲穂の文化. 東京毎日新聞 (1942.12.27) α
- (224) 1943.01.20 農は国の大本. 農大新聞 (1942.12.05) α
- (225) 1943.01.21 みそぎはらひ. 大阪毎日新聞 α
- (226) 1943.02. 印度地政論. 公論, 6(2) α
- (227) 1943.02. 「決戦言論の方途」座談会. 現代, 24(2) S
- (228) 1943.02 イラクの地政学的考察 — メソポタミアの復活 —. 政界往来, 14(2) (1943.01.17) α
- (229) 1943.02. 南太平洋の地政学 — 濠洲ニュージールランドに重点を置いて —. 大阪新聞旬刊特輯 α
- (230) 1943.02.20 序. 小葉田亮『ベーリング海 (新世界叢書)』目黒書店 (1942.12) α
- (231) 1943.02.22 太平洋の地政学 — 読書指針 —. 東京新聞 夕刊 (1943.02.18) α
- (232) 1943.03. 太平洋のみそぎはらひ. 古事記研究, 7(3) α
- (233) 1943.03.29 まづ自己錬成. 京都新聞 (1943.03.21) α
- (234) 1943.04 カール・ハウスホーファー論. 国民評論, 15(4) (1943.03.17) α
- (235) 1943.05 うなばらのくに — 日本地政学の見地より —. 古事記研究, 7(5) α
- (236) 1943.05 海洋地政学 — 海の統治 —. 新文化, 13(5) (1943.04.08) α
- (237) 1943.05 志士と海国経綸 — 海軍記念日に因みて —. 大洋, 5(5) (1943.03.25) α
- (238) 1943.05.29 地政学の書に就いて. 日本読書新聞 α
- (239) 1943.06. 「なかつくに」と「よもつくに」. 古事記研究, 7(6) (1943.05.15) α
- (240) 1943.07. 民族に就いて. 古事記研究, 7(7) (1943.06.18) α
- (241) 1943.08. ヨーロッパとは何ぞや. 国民評論, 15(8) (1943.07.14) α
- (242) 1943.08. 大西洋 — 第四の反攻路 —. 古事記研究, 7(8) (1943.07.16) α
- (243) 1943.08. 地方行政協議会に期待する. 政界往来, 14(8) (1943.07.12) α
- (244) 1943.08. 印度の地政学. 文芸世紀, 5(9) (1943.07.07) α
- (245) 1943.08.25 皇国の進み行く道. 京都新聞 (1943.08.23) α
- (246) 1943.09. 地政学上より見たる印度. 改造, 25(9) α
- (247) 1943.09. 敵の思想謀略 — 特にその由来するところに就いて —. 国民評論, 15(9) (1943.08.14) α
- (248) 1943.09. アメリカ — その地政学的運命 —. 古事記研究, 7(9) (1943.08.18) α
- (249) 1943.09. 敬神と国土愛. 新天地 (1943.07.20) α

- (250) 1943.09.01 大東亜の理念. 大日本言論報国会編『世界観の戦ひ』社団法人同盟通信社 (1943.03.13) S
- (251) 1943.09.04 大東亜建設と宗教. 日本読書新聞 (1943.08.16) α
- (252) 1943.09.15 昭和創新の顕現へ(下) — 国本の信念に徹せよ — 関西十学者の共同宣言 —. 読売新聞 S
- (253) 1943.10. 一つの鑑戒. 古事記研究, 7(10) (1943.09.21) α
- (254) 1943.10.13 殷鑑遠からず. 京都新聞 (1943.10.11) α
- (255) 1943.11. アジア復興と教育政策. 興亜, 11月号 (1943.09.25) α
- (256) 1943.11. 地中海 — その地政学的考察 —. 古事記研究, 7(11) (1943.10.20) α
- (257) 1943.11.21 出陣残留の全学徒へ — 壮行と激励の言葉 — 私心を挟まざれ —. 週刊朝日, 11月21日号 (1943.10.27) α
- (258) 1943.12. 法文科の将来. 科学思潮, 12月号 (1943.11.03) α
- (259) 1943.12. 座談会 赴難の学 — 出陣学徒に饒る —. 中央公論, 第58年12月号 (1943.11.06) 小牧他4名 S
- (260) 1943.12. 大東亜地政学新論 — 序にかへて —. 地理論叢, 13 (1943.04.15) α
- (261) 1943.12. 神前結盟 — 社頭の誓ひ —. 西日本 (1943.11.07) α
- (262) 1943.12.01 大東亜地政学新論. 星野書店 α
- (263) 1943.12.21-22 地政学上より見た印度. 京都新聞 (1943.12.16) α
- (264) 1944.01. 人文科学の決戦態勢. 国民評論, 16(1) (1943.10.30) α
- (265) 1944.01. 大東亜と世界. 東洋貿易研究, 23(1) (1943.12.17) α
- (266) 1944.01.07 大東亜と世界大和. 京都新聞 (1943.12.20) α
- (267) 1944.01.15 大東亜建設の五原則 — 共存共栄 —. 毎日新聞東京及大阪 (1944.01.04) α
- (268) 1944.01.17 思想戦と地政学. 大日本言論報国会編『思想戦大学講座』時代社 S
- (269) 1944.01.20 図書奉獻. 東京新聞 (1943.12.25) α
- (270) 1944.02. 大東亜結集の本義. 改造, 2月号 (1944.01.08) α
- (271) 1944.06.15 皇国日本の地政学. 文部省教学局編『日本諸学講演集第十七輯地理学篇』印刷局 (1943.11.25) S
- (272) 1944.06.20 大東亜地図大系. 博多久吉 S
- (273) 1944.07.18 浄めよ祭の庭 — 新攻勢 —. 大阪新聞 夕刊 α
- (274) 1944.07.21 いま起たざれば! — 一億国民に檄す —. 毎日新聞 (大阪) α
- (275) 1944.07.27 七月十八日 — 新攻勢 —. 大阪新聞 夕刊 α
- (276) 1944.07.30 世界新秩序建設と地政学. 旺文社設立事務所 α
- (277) 1944.08.04 太平洋戦局の地政学的考察. 大阪新聞 3日夕刊 α
- (278) 1944.08.14 敵米の魔手. 大阪新聞 13日夕刊 α
- (279) 1944.08.21 不平の正体. 大阪新聞 20日夕刊 α
- (280) 1944.08.27 サイパン同胞自決の報に接して. 週刊朝日, 8月27日号 α
- (281) 1944.09. 錦の御旗の御もとに. 国民評論, 16(9) (1944.07.12) α
- (282) 1944.09.05 日本地政学覚書. 秋田屋 α
- (283) 1944.09.20 アメリカ的秩序の撃潰. 大阪新聞 19日夕刊 α
- (284) 1944.09.29 じり貧を警む. 大阪新聞 28日夕刊 α
- (285) 1944.10.10 無題録. 大阪新聞 9日夕刊 α
- (286) 1944.10.13 日独使節交換の要. 大阪新聞 12日夕刊 α
- (287) 1944.10.17 腹. 大阪新聞 16日夕刊 α
- (288) 1944.10.22 一坪農園の体験. 大阪新聞 21日夕刊 α
- (289) 1944.10.25 捷報に応へん. 大阪新聞 24日夕刊 α
- (290) 1944.10.28 レイテ湾の暗合. 大阪新聞 27日夕刊 α
- (291) 1944.11.10 盛んなる哉. 大阪新聞 9日夕刊 α
- (292) 1944.12.12 御親拝に誓ふ. 京都新聞 α
- (293) 1945.01. 放送私見. 学海, 2(1) (1944.11.03) α
- (294) 1945.01. アジアを跨ぐ — 副島次郎伝 —. 週刊少国民 α
- (295) 1945.01.30 大南方地政論. 太平洋書館 室賀信夫と共著 (1943.01.20-02.05) α
- (296) 1945.04. 此の頃の日記から — 時局日誌 —. 時局日本 α
- (297) 1945.04. 大いなる神州のみそぎはらひ. 神州 α
- (298) 1945.04.03&06 神機到るの日まで. 中外日報 (1945.03.30) α
- (299) 1945.04.05 地政学からみた琉球. 朝日新聞 S

- (300) 1945.05.20 平安京変遷の地理的考察. 史林, 30(1) (1944.11.21) α
- (301) 1945.06.06 沖繩決戦に勝つ道. 中外日報 (1945.05.30) α
- (302) 1945.07.12 地の利を生かすもの (地の利は必勝、顧みよ我等心に隙なきか). 大阪新聞 夕刊 α
- (303) 1945.07.17 必勝の道. 中部日本新聞 α
- (304) 1945.07.26 レキオスの黄金. 東京新聞 「「必勝の道」と略同文, 東京新聞縮小版となされ紙面なきため
「レキオスの黄金」として要約掲載さる *ちなみに原題は「七百年戦争決戦の時は迫れり」である α

③戦後 (1945.09-1985.06)

- (305) 1949.03.01&04.01&05.01 氷雪にいだむーアムンゼンの南極探検記ー. 私達の社会科
- (306) 1951.09 ユートピア. 大阪人, 5(9) α
- (307) 1951.09 砂丘のある風景. 旅, 9月号
- (308) 1951.09.01 牧野聞書. 近畿民俗, 6
- (309) 1952.08.03 岩間寺. 宇治川展望, 5 α
- (310) 1952.11.01 三高復興. 三高同窓会会報, 2 α
- (311) 1952.12.11 歴史と地理の研究は愛国心の涵養に役立つであらうか. 民防新聞, 第39・40合併号 α
- (312) 1953.01.10 宇治の三尾. 宇治川展望, 10 α
- (313) 1953.03.17 琵琶湖真珠の将来. 朝日新聞滋賀版 α
- (314) 1953.05.30 安土水郷行. 新大阪, 5月30日号 α
- (315) 1953.06&07 地理学と社会科地理ー地誌学的地理学的重要性ー. 学園, 2(6) α
- (316) 1953.07.25 化石の村々. 宇治川展望, 号外 α
- (317) 1953.09.01 鷺峯山. 京阪観光, 1(3) α
- (318) 1953.11.01 日本の世界的地位ー日本は世界に発展できるかー. リーダーシップ, 3(11) α
- (319) 1953.12.20 菅浦見聞記. 近畿民俗, 12
- (320) 1954.01.01 無題. 滋賀教育, 51 α
- (321) 1954.01.01 真珠の知識. 実業評論, 6(1) (新春特別増大号) α
- (322) 1954.01.15 西近江路の将来性. 滋賀大学学芸学部紀要, 3
- (323) 1954.02.01 明日の社会科を語る. 滋賀教育, 52 α
- (324) 1954.02.04 汝自らを信ぜよ. 中部日本新聞 α
- (325) 1954.04.01 山王祭. 京阪観光, 2(4) α
- (326) 1954.05.01 又無題. 滋賀教育, 55 α
- (327) 1954.06.01 有関心. 滋賀教育, 56 α
- (328) 1954.06.01 雨の安土行. 京阪観光, 2(6) α
- (329) 1954.07.01 しかへし. 滋賀教育, 57 α
- (330) 1954.08.01 東南寺説法. 京阪観光, 2(8) α
- (331) 1954.09.01 宇治の猪垣. 宇治川展望, 21 α
- (332) 1954.10.20 位置に関する考察. 叡山文化総合研究会編『比叡山：その歴史と文化 (叡山総合研究会報告書)』叡山文化総合研究会
- (333) 1954.12.15 愛知川上流地域に於ける交通路の変遷と回春. 滋賀大学学芸学部紀要, 4
- (334) 1954.12.25 比叡山延暦寺編『比叡山』関書院 α
- (335) 1955.01 章亡先生. 三高同窓会会報, 6 α
- (336) 1955.05.20 比叡山の自然&比叡山の歴史. 比叡山延暦寺編『天台宗総本山比叡山延暦寺綜覧』比叡山延暦寺綜覧出版部 α
- (337) 1956.01.14 法力を秘めて. 京都新聞 夕刊「表情」(55) α
- (338) 1956.02.01 鈴鹿山脈西縁山村の研究ー脇ヶ畑村の場合ー. 滋賀大学学芸学部紀要, 5 川合重太郎・宮畑巳年生・小林博と共著
- (339) 1956.02.15 大君ヶ畑聞書. 近畿民俗, 18
- (340) 1956.03.01 琵琶湖ー思い出の景観ー. 国立公園, 76
- (341) 1956.04.30 法力を秘めてー護法善神ー. 京都新聞社編集局編『京都の仏像』河出新書 α
- (342) 1956.10.30 野の開発ー蒲生野の場合ー. 田中秀作教授古稀祝賀会編『田中秀作教授古稀記念地理学論文集』柳原書店 α
- (343) 1956.11.24 ひとり旅エチオピアの思い出. 旺文社学生週報 α
- (344) 1956.12.15 朽木谷の歴史地理学的概観. 滋賀大学学芸学部紀要, 6

- (345) 1957 研究への第一歩 ― 回想 ―. 滋賀大学学芸学部地理学研究会会誌, 5 α
- (346) 1957.01.07 牛賊 (約束の午後四時). 毎日新聞 夕刊「茶の間」欄 (東京毎日、1月8日夕刊) α
- (347) 1957.01.15 随想 (春日の庭療). 滋賀会館クラブ通信 α
- (348) 1957.03.31 求められた重量感. 滋賀日々新聞 湖国の美161 α
- (349) 1957.08 水と文化 ― 琵琶湖と現代産業 ―. 東洋レーヨン瀬田工場雑誌「からはし」, 8月号
- (350) 1957.12.15 近江盆地周縁山村の研究 ― 丹生谷の場合 ―. 滋賀大学学芸部紀要, 7 宮畑巳年生と共著
- (351) 1958.12.15 杉野谷調査覚書. 滋賀大学学芸部紀要, 8 川合重太郎・宮畑巳年生と共著
- (352) 1959.04 湖と峠 ― 思出の景観 ―. 東洋レーヨン滋賀工場雑誌「れいえん」, 4月号 α
- (353) 1959.04.05 人文地理学. 新元社 築山治三郎・位野木壽一と共編 S
- (354) 1959.09.01 タイの目. 滋賀日々新聞 「魚眼」欄 α
- (355) 1959.10.01 回想の道. 京都春秋, 1(2) α
- (356) 1959.10.04 確かな報道豊かな批判. 滋賀日々新聞 [新聞週間標語「確かな報道豊かな批判」に寄せて] α
- (357) 1959.10.31 挨拶. 滋賀大学学芸学部同窓会会報, 10 α
- (358) 1959.11 文化と教養 東洋レーヨン瀬田工場機関紙「からはし」, 11月号 α
- (359) 1959.12.03 口舌の雄. 滋賀日々新聞 「魚眼」欄 α
- (360) 1959.12.30 因縁. 滋賀日々新聞 「魚眼」欄 α
- (361) 1960 三高に学んで特によかつたと思うこと. 三高同窓会会報, 17 α
- (362) 1960.01 静軒随想. 滋賀県教育研究所報「志賀」, 12 α
- (363) 1960.03.01 大学の将来. 滋賀日々新聞 「魚眼」欄 α
- (364) 1960.05.03 円通寺の庭. 京都新聞 夕刊「古都再見」欄 α
- (365) 1960.05.24 ある大学の思出. 滋賀日々新聞 「魚眼」欄 α
- (366) 1960.08.13 山科毘沙門堂. 京都新聞 夕刊「古都再見」欄 α
- (367) 1960.08.31 第一人者. 滋賀日々新聞 「魚眼」欄 α
- (368) 1960.09.08 元三大師誕生会に当りて. 比叡山時報, 9月8日号 α
- (369) 1960.10.01 細かい地方記事を多く. 滋賀日々新聞 α
- (370) 1960.10.06 ヘキ地への関心. 滋賀日々新聞 「魚眼」欄 α
- (371) 1960.11.03 文化の日に因んで. 学園通信, 74 α
- (372) 1960.12 らしさ. 彦根ロータリークラブ会報, 42 α
- (373) 1960.12.31 江越国境交通路の変遷と交通集落としての中河内. 滋賀大学学芸学部紀要, 10 川合重太郎・木村憲治と共著 β
- (374) 1961.01.04 顔. 滋賀日々新聞 「魚眼」欄 α
- (375) 1961.01.04 神代の光は今も 四明岳の初日の出. 京都新聞 夕刊「続古都再見」欄 α
- (376) 1961.01.17 わが師わが友. 中部日々新聞 第二滋賀版 α
- (377) 1961.01.18 教育というもの. 教育時報 (滋賀県教育委員会), 12(3)
- (378) 1961.06.18 花に関する投書. 滋賀日々新聞 「魚眼」欄 α
- (379) 1961.07.03 東京礼讃. 滋賀日々新聞 「魚眼」欄 α
- (380) 1961.07.15 元三大師誕生会に当りて. 『生きんとする力』 α
- (381) 1961.07.20 第三の名簿. 大阪陵水会会員名簿巻頭文 α
- (382) 1961.08.15 真如堂界限. 三高同窓会会報, 20
- (383) 1961.10.03 風景に堪う. 滋賀大経短新聞, 創刊号 α
- (384) 1961.10.23 近江高校生の皆さんへ. 近江高校新聞, 5 α
- (385) 1961.11.15 四明岳の初日の出. 京都新聞社編「続古都再見」河出書房新社 α
- (386) 1961.12.28 京の中華は彦根よりまずい. 広報おおつ, 122 α
- (387) 1962.02.24 新時代の女性に望む. 滋賀県高等学校湖南地区家庭クラブ編集部発行「わかあゆ」, 2 α
- (388) 1962.10.15 滋賀放送増強を祝して. 滋賀放送1KW増力記念号 α
- (389) 1962.12.31 信楽陶業の生産構造. 滋賀大学学芸学部紀要, 12 宮畑巳年生と共著 S
- (390) 1963.05.30 開学祭に当って学生諸君へ. 滋大陵水新聞, 64 α
- (391) 1963.05 東洋レーヨン技術専門学校第一回卒業式祝辞. 東レ時報, 5月号 α
- (392) 1963.07.15 初夏の安土. 京都放送, 13 α
- (393) 1963.09.05 序文. 歴史地理学紀要, 5(考古地理学) α
- (394) 1963.10.25 消えゆく部落の民俗調査に思う. 民俗文化, 2 [菅沼晃次郎草稿] α
- (395) 1963.12.25 滋賀県民俗博物館の設立を目ざして. 民俗文化, 4 [菅沼晃次郎草稿] α

- (396) 1964.02.10 総合民俗博物館建設の構想. 民俗文化, 5 [菅沼晃次郎草稿] α
- (397) 1964.03.01 郷土の破壊. 中部日本新聞 滋賀県版「日曜随筆」欄 α
- (398) 1964 新入学生諸君へ. 滋賀大学学生便覧, 1964年版巻頭 α
- (399) 1964.03.25 会の発展を願って. 民俗文化, 6 S
- (400) 1964.04.16 未来を担う若人のために. 滋賀大学学芸新聞, 34 α
- (401) 1964.03&04 私の道楽. 彦根ロータリークラブ会報, 70(三・四月合併号) α
- (402) 1964.04.25 ダム建設による水没地の調査と目的. 民俗文化, 9 [菅沼晃次郎草稿] α
- (403) 1964.07.25 愛知川ダム水没地区調査の意義. 民俗文化, 10 [菅沼晃次郎草稿] α
- (404) 1964.07 会長就任に当って. 彦根ロータリークラブ会報, 72 α
- (405) 1964.09.25より発売 学園エッセイ 学園修行に沈潜したい青年を求める. 蛭雪時代10月臨時増刊号 α
- (406) 1964.10.01 序. 滋賀大学経済短期大学部創立十周年記念論文集(彦根論叢第106&107号) α
- (407) 1964.12.25 滋賀民俗学会の構想と指向. 民俗文化, 15 [菅沼晃次郎草稿] α
- (408) 1965.01 年頭の御挨拶. 彦根ロータリークラブ会報 α
- (409) 1965.02.25 丹生川谷の民俗調査に当って. 民俗文化, 17 [菅沼晃次郎草稿] α
- (410) 1965 新入生諸君に. 滋賀大学学生便覧, 1965年版巻頭 α
- (411) 1965.04.17 挨拶. 体育会(滋賀大学経済学部), 創刊号 α
- (412) 1965.05.31 開学祭会長演説. 滋賀大学開学祭プログラム α
- (413) 1965.05.25 地方の文化財を守る保護条例の実施状況. 民俗文化, 20 [菅沼晃次郎草稿] α
- (414) 1965.08.25 滋賀県下 木地屋資料保護の急務. 民俗文化, 23 α
- (415) 1965.08.25 序文. 橋本鉄男『比良山系東麓のショウズヌキについて』(滋賀民俗学会紀要(3)) 滋賀民俗学会 α
- (416) 1965.10.25 湖西線の建設と民俗資料の調査. 民俗文化, 25 S
- (417) 1966.04 海津大橋の桜—古い桜の今昔を背景とした—. 京阪, 4月号 α
- (418) 1968.05.12 静居. 膳所高校七十年記念誌 α
- (419) 1968.07.01 信. 大法輪, 35(7) α
- (420) 1969.04.18 新入会のことば. 京都東ロータリークラブ月報, 149 α
- (421) 1969.05 西近江路の思い出. FHG, 14 α
- (422) 1969.09.10 長寿の神. 多賀大社社報「多賀」, 7 α
- (423) 1970.07.24 昭和四十五年六月五日の日記. 京都東ロータリークラブ月報, 164(りくつぬき欄) α
- (424) 197? 安曇川上流の村々見聞誌&朽木谷能家民俗資料緊急調査報告序説. 滋賀県文化財保護課仮印刷報告書『朽木谷能家民俗資料緊急調査報告』 α
- (425) 1971.12.19 序文. 木村至宏著『近江の道標』民俗文化研究会 α
- (426) 1972.05.19 城造り. 京都東ロータリークラブ月報, 186(会員趣味リレー漫筆(9)城造りの巻) α
- (427) 1972.10.20 藁草履. 京都東ロータリークラブ月報, 191(「心あたたまる話」欄) α
- (428) 1972.12.20 国土計画今昔談. 京都学園大学だより, 7 [昭和四十七年十一月三日, 京都学園大学学園祭に於ける教養講座に於ける講演要旨—昭和四十七年十一月十五日要約稿了] α
- (429) 1973.04.05 大津市史の復刊を祝す. [大津市史覆刻刊行会の為に執筆] α
- (430) 197? 守山市史成る.「守山市史」推薦文 α
- (431) 1974 滋賀県史 昭和篇を奨める. α
- (432) 1974.02.15 提言. 京都東ロータリークラブ月報, 207(1月号, 提言欄) α
- (433) 1975.01.01 国見一年の始めに—. 伸びゆく亀岡, 143 α
- (434) 1975.10.18 寂しき国への旅. 西田和夫・西田みどり共編『佐保路: 西田与四郎追悼文集』西田和夫 α
- (435) 1975.11.01 三ぼうの出合い. 菅沼晃次郎『近江の民俗』民俗文化研究会 α
- (436) 1976.02 節子ちゃんのことを考える時に何かの参考になるかも知れない資料二、三. 三橋時雄編『吾木香: 三橋(鈴木)節子を偲ぶ』三橋時雄 S
- (437) 1976.03.25 平津台回想. 滋賀大学教育学部同窓会会報, 26(百周年記念号)「学窓回顧」欄 α
- (438) 1976.06 まだ民俗などという言葉が知らなかった頃の事ども. (池田弥三郎ほか監修『日本民俗誌大系 第11巻 未刊資料Ⅱ』角川書店に付属の) 日本民俗誌大系月報, 11 α
- (439) 1976.12.17 「轉会」報告 α
- (440) 1977.02.20 村の子. アルク, 3月号(通巻第139号) (「五百字健康」欄) α
- (441) 1977.04.10 不断勉強 常時努力 祈念神仏 臨機応変. 鶴岡正夫編『現代滋賀の百人』育英出版社 α
- (442) 1977.06.28 私の人生. 滋賀日日新聞 α

- (443) 1977.08.14 滋賀県民俗文化財調査についての談話. 朝日新聞滋賀版 α
 (444) 1977.10.28 随想 無題録. 京都東ロータリークラブ月報, 251(随想欄) α
 (445) 1978.01.01 随想 無題. 滋賀県神社庁報, 82 α
 (446) 1978.05.01 思い出すことなど. 園城寺 (総本山園城寺発行), 23 α
 (447) 1978.11.07 「ジュンちゃん」のこと. 『中山玄雄大僧正を偲びて』(発行者 中山玄晋) α
 (448) 1978.12 序. 菅沼晃次郎『守山の火のまつり』滋賀民俗学会 α
 (449) 1980.07.01 戦前、戦中、戦後. 湖国と文化 (滋賀県文化体育振興事業団), 12 α
 (450) 1981 私のひとこと. 京都東ロータリークラブ創立二五周年誌 α
 (451) 1981.03 序. 大津市教育委員会編『大津祭総合調査報告書』(合冊改訂版) α
 (452) 1981.07 南佛の思い出. FHG, 65(地中海特集号) α
 (453) 1982 何をばやばや. 『永田圭一追想録』大阪府吹田市 [昭和五十七年一月二十四日午前二時稿了] α
 (454) 1982.01.01 可愛い犬の子との不思議な縁. 滋賀県神社庁報, 94 α
 (455) 1984 おしゃべりさろん: 元滋賀大学学長小牧實繁氏. でんきさろん (大津市), 15 S
 (456) 1984.11.24 近江国見聞録 ― 伝承を訪ねて五十年 ―. 滋賀民俗学会 S
 (457) 1985.06 わがおもひでの記. 古代文化, 37(6) S

④戦後行った講演など

- (1) 1954.09.22 琵琶湖の話. JOBKテレビ放送 午後1:00-25 α
 (2) 1955.05.30 朽木谷. NHK放送「ふるさとの歩み」 α
 (3) 1955.10.22録音, 10.31放送 比叡山坂本のほとり. NHK放送「ふるさとの歩み」 α
 (4) 1955.11.29 土地と人間生活. 滋賀大学附属小・中学校講演 α
 (5) 1960.09.03 元三大師誕生会に当りて. ラジオ大阪「お仕事の前に」放送 午前6:10-20 α
 (6) 1970.08.07 神職の道. 第十一回全国教育関係神職協議会全国大会記念講演 (多賀大社参集殿にて) α
 (7) 1973.01 比叡の光. 現代の教育 (近畿放送) α
 (8) 1973.08.26 近江の民俗と文化. 守山市文化協会設立記念講演 午後2:30-4:00 α

資料: 「小牧実繁著書講演論文目録」(小牧自筆目録, 目録 α) 及び「小牧実繁先生著作目録」(1968年, 目録 β)

注

1. 単行本はゴシック体で記す。
2. α にしか収録されてない文献には α を右端に添えた。
3. β にしか収録されてない文献には β を右端に添えた。
4. 作成者が補った文献にはSを右端に添えた。
5. 小牧が文献に添えた書き込みは, [] 内に記した。
6. 作成者が書誌的事項を補足する際は, *に続けて記した。
7. 戦中の文献は, 掲載された文章の末尾に付記された執筆年月日を () に入れ, 右端に添えた。ただし, 注2, 3, 4よりも左に表記する。また, 未見のものや記載がないものを除く。
8. 目録と若干異なっているが, 実物を入手したものに関しては, 実物に記載されている書誌的事項を記した。
9. (217) (250) (268) (271) は, 小牧が行った講演の原稿である。目録 α には原稿所収の文献は示されていない。
10. (161) (227) (259) は, 小牧が参加した座談会の内容を伝えるものである。
11. (163) (170) (186) (252) (299) は, 小牧の談話が新聞の記事になったものである。

うなものであると言えよう。公職追放解除の後、滋賀大学就職の際の提出書類として作成された調査表の控えだと推測されるのが〔B〕である。それを作成する際、〔C〕〔D〕〔E〕を参照したことが推測される。ただし、〔C〕〔E〕はおそらく論文を発表するたびに増補して作成されたものであり、再就職時に一気に作成されたものには見えない。それに対し、〔D〕は再就職時に作ったメモのように思われる。なお、〔I〕の中で少なくとも④⑤は滋賀大学に提出されたものである。その収録論文数は〔C〕〔E〕に比べて少ないことから、彼が〔C〕〔E〕から選択して〔I〕を作成したことが推測される。〔F〕〔G〕は戦後彼がおそらく論文などを発表する度に書き加えていったものであろう。〔A〕〔H〕は晩年の彼の活動がうかがえる資料である。

以上紹介してきた目録 α と、既存の目録 β の情報を総合して作成したのが「小牧実繁著作目録」（表7、以下目録 γ と表記する）である。ただし、この目録 γ 作成に当たって、筆者は独自の調査により補充を行った。これは、目録をより完全なものにするための試みであったが、今回提示した目録 γ が小牧の著作の完全な目録になっているとは断定できない。今後、修正していく必要が生じるであろうことをあらかじめ断っておく。

Ⅲ. 小牧の著述活動の傾向

では、目録 γ からうかがえる小牧の著述活動の傾向は如何なるものであろうか。大きく戦前・戦中・戦後に分けて述べてみよう。本稿では、戦前を1938年10月まで、戦中を1938年11月から1945年8月まで、戦後を1945年9月以後を指す語として使う⁶⁾。この際、目録 α のデータから作成した表2～6も資料として使用する。まず、戦前の彼は、表8が示すように、『地球』、『地理教育』、『歴史と地理』、『地理論叢』に多くの論文を発表している（この4誌だけで全体の64%（136点中87

点）を占める）。この内、『地理教育』誌以外は京都帝国大学関係の雑誌であるから、彼は勤務校である京都帝国大学関係の地理学・歴史学・考古学関係の雑誌に多くの論文を発表していたことになる。そして、その中でも地理学関係の雑誌への寄稿が目立つ。また、これらの雑誌は学術雑誌ないしそれに近い性格を持つものであった。なお、本数こそ少ないが注目すべきは、彼が民俗採集を行った成果を『郷土研究』に発表していることである。また、「地理学と民俗学」と題して講演も行っている（134）⁷⁾。これは、戦後彼の研究の中心となる民俗学への関心がこの時点で既に存在していたことを示すものである。なお、彼は1927年から1929年在外研究員としてドイツ留学を命じられるも、主にフランスに

表8 戦前の掲載誌（紙）

雑誌・新聞名	本数
地球（地球学団）	39
地理教育（地理教育研究会）	19
歴史と地理（史学地理学同致会）	17
地理論叢（京都帝国大学文学部地理学教室）	12
ドルメン（岡書院）	9
地理学（古今書院）	8
風景（風景協会）	4
郷土研究（郷土研究編輯所）	3
人類学雑誌（東京人類学会）	2
民族（民族発行所）	2
史林（史学研究会）	2
地理（地人書館）	2
地理学年報（地理学年報編輯所）	2
地理と経済（日本経済地理学会）	2
中外日報	2
その他（雑誌・新聞）	9
分担執筆や寄稿（小牧自身の編著書を除く）	2
合 計	136

注 1) 資料として表7を用いた。
2) 発表回数が1回の雑誌・新聞はその他とした。
3) その他・分担執筆や寄稿を除き、京都帝国大学関係の雑誌は太文字にした。

滞在していた（表4）。また欧米諸国を旅行している。その際学んだことが、帰国後の彼の論文に反映されている例は少なくない。

次に、戦中の彼の著述発表の場は、表9が示すように、『大阪新聞』が突出している他は、実に様々な新聞や雑誌に涉っていた。一度しか発表していない新聞や雑誌も少なくない。一方、地理学関係の雑誌は『地理論叢』ぐらいで、他は一般向けの新聞や雑誌に文章や談話を発表しているのも特徴的である。新

表9 戦中の掲載誌（紙）

雑誌・新聞名	本数
大阪新聞	15
古事記研究：革新国策総合雑誌（日本論叢社）	8
週刊朝日	7
京都新聞	7
現代（大日本雄弁会講談社）	6
政界往来（政界往来社）	6
国民評論（国民評論社）	5
朝日新聞	5
東京新聞	5
新天地（新天地社）	4
大阪毎日新聞	4
地理論叢（京都帝国大学文学部地理学教室）	3
公論（第一公論社）	3
改造（改造社）	3
大洋（文芸春秋社）	3
京都帝国大学新聞	3
日本読書新聞	3
文芸世紀（文芸世紀社）	2
読売新聞	2
中外商業新報	2
農大新聞	2
中外日報	2
その他 雑誌	37
その他 新聞	6
分担執筆や寄稿（小牧自身の編著書を除く）	9
合 計	152

注 1) 資料として表7を用いた。
2) 発表回数が1回の雑誌・新聞はその他とした。
3) 新聞は太文字にした。

聞に発表した文章が全体の37%（全152点中56点）と他の時期に比べて多いことも指摘できる。この時期の文章の内容はほとんどが「日本地政学」に関するものである。また、この時期は8年間で他の時期に比べて遥かに短いにもかかわらず、本数では一番多い。この時期の文章については、IV章で資料批判を行う。彼は、1938年の万国地理学会議に出席しているが（表4）、この会議から帰国した直後、11月5日発行の『京都帝国大学新聞』上で初めて「日本地政学」の主張を行う（140）⁸⁾。その意味で、彼が万国地理学会議で何を見聞したかは、「日本地政学」を考える上で重要な問題かもしれない。彼が行った講演の一覧表である表5は、当時「日本地政学」を主張していた彼が社会的に認知され、八面六臂の「活躍」をしていたことを示すものである⁹⁾。なお、彼は1943年1月から、当時の言論界を牛耳ったとされる大日本言論報国会の会長徳富猪一郎（蘇峰）より任命され同会理事を務めることになるが（表3、表6）¹⁰⁾、この事実こそ戦後彼が公職追放される理由となったようである（表6）¹¹⁾。

戦後の彼は、表10が示すように、『滋賀日日新聞』、『民俗文化』、『滋賀大学学芸学部紀要』に多くの文章を発表している。発表した新聞や雑誌は戦後も多岐にわたるが、圧倒的に滋賀県関係の新聞や雑誌が多い。彼が滋賀大学教授、さらには学長であったことがその原因であろう。またこの時期は、戦前・戦中と比べて、全国的な影響力を有する新聞や雑誌への執筆機会がほとんどなかったことも指摘できる。文章の内容は、学術論文と言えるものは少なく、エッセイに近いものが多い。また、戦後彼の関心は、地理学から民俗学へ移ったように思われる。彼は1963年に滋賀民俗学会を設立し、自ら会長を務めた。そして会の機関紙『民俗文化』に多くの文章を発表した他¹²⁾、『近畿民俗』へも寄稿している。なお、戦後まもなく彼は、京都帝国大学を辞

表10 戦後の掲載誌（紙）

雑誌・新聞名	本数
滋賀日日新聞	14
民俗文化（滋賀民俗学会）	11
滋賀大学文学部紀要（滋賀大学）	8
月報（京都東ロータリークラブ）	7
滋賀教育（滋賀県教育会）	5
会報（彦根ロータリークラブ）	4
会報（三高同窓会）	4
京阪観光（不明）	4
宇治川展望（不明）	4
京都新聞	4
近畿民俗（近畿民俗刊行会）	3
FHG（野外歴史地理学研究会会誌）	2
会報（滋賀大学文学部（教育）学部同窓会）	2
滋賀県神社庁報	2
からはし（東洋レーヨン瀬田工場機関紙）	2
朝日新聞	2
中部日本新聞	2
その他 雑誌	36
その他 新聞	7
分担執筆や寄稿（小牧自身の編著書を除く）	24
不 明	4
合 計	151

注 1) 資料として表7を用いた。

2) 発表回数が1回の雑誌・新聞はその他とした。

3) その他・分担執筆や寄稿を除き、滋賀県関係の雑誌・新聞は太字にした。

し（表2）、1947年には公職追放仮指定を受けており（表6）、教職に付くことが許されない境遇にあった。やがて公職追放は解除され（[I]の⑤）、滋賀大学教授となるのであるが、それまで彼は三木社という出版社や京阪電気鉄道株式会社に勤務していたことが分かる（表2）¹³⁾。

IV. 小牧研究の新たな課題と留意点

以上のように、目録γから小牧の著述活動の傾向がうかがえた。では、目録γを利用することで他にどのような事実が判明するだろうか。上述のように、目録γは既存の目録β

に比してかなりの量の文献を補い得た。ある人物の思想研究の前提作業として、できるだけ詳細にしてかつ周到な著作目録を整備することは極めて重要で、必要不可欠である。その意味で今回筆者が行った増補は、小牧の思想研究の一助となるものであるし、特に戦中の部分を補い得たことの意義は大きいと考える¹⁴⁾。目録γを利用することで、特に彼が戦中主張した「日本地政学」についてより厳密な検討をなし得るようになるであろう。なぜなら、「日本地政学」に関する従来の研究に、検討の対象が小牧の代表的な著書のみにとどまる傾向が見られるからである¹⁵⁾。これら従来の研究は、見方によれば、断章取義と批判されても致し方ないものである。なお、従来の研究には、「日本地政学」についての専論が見受けられないことも指摘できる¹⁶⁾。また、戦後の部分は、小牧の一生を追跡する個人史的研究（あるいは人物研究）に資するところ大であるし、「日本地政学」との関連のみに絞っても、戦後の部分を利用することで、戦後彼が「日本地政学」に対してどのような思いを抱いていたかが読み取れるかもしれない¹⁷⁾。

最後に、戦中彼が発表した文章について資料批判を行っておく。まず、表7の文章は確かに全て小牧実繁の名の下に公表されたものではあるが、中に小牧以外の人物が行った研究成果が含まれていることが指摘できる。例えば「仏印の地政学的意義」（160）は、室賀信夫が1941年6月20日に書き上げ、「吉田の会」¹⁸⁾で発表したと推測される研究報告「西貢港の地政学的位置に就きて」の3章までと瓜二つである¹⁹⁾。また、小牧は自らの名で出版した著書の序文で次のように述べている（145）。

優れた同憂の士の絶えざる鞭撻を以てしても、なほ私自身の、又私独りの力を以てしては此の書は遂に成り得なかつたであら

う。何人かの若き優れた学徒の一心同体的な、真に涙ぐましい協力なくしては此の書は遂になり得なかつたであらう。此の書は実にそれ等凡ての同憂者協力者等との共著であるべきものである。本文中に「吾々」といふ一人称が屢々用ひられるのは、実はそのためである²⁰⁾

さらに、1942年と1943年の文章発表数（1942年＝56、1943年＝43）に注目すれば分かるように、小牧がこれほどおびただしい数の文章を発表し得たということ自体が、逆に彼がすべての文章を独力で執筆したとは限らないことを物語っていると言えよう。要するに、この時期の文章は小牧自身の研究成果というよりも「吉田の会」のメンバー全体の研究成果と捉えた方が適切だろう。以上述べてきた執筆者の問題、そしてその特定という作業は、「吉田の会」メンバーの思想の融合体である「日本地政学」²¹⁾を読み解く際の有効な方法かもしれない。

次に、文章の内容があくまで「国民の教育を主眼とする、国民精神昂揚のためにする教育的意義を有するもの」(208)である可能性が高いことが指摘できる。「日本地政学の将来」(208)で、小牧は次のように述べている。

日本地政学、皇戦地政学の真の結論が、皇国日本の作戦に関し、結局また皇軍の機密にも係はるに至るべきは必然であり、従つて又、日本地政学的全結論が新聞雑誌等の如き公開の機関に公表せられるが如きことは、実は当初より考へられないことであつたのである。……日本地政学は未だ嘗て著書や新聞や雑誌やの如き公開のものを通じて当路の責任者に朔（愆）へたことはない。これらの公開の機関を通じて発表したものは何れも皇国日本国民の精神教育皇国民意気の昂揚のためにとの目標のもとに物せられたのである（カッコ内は筆者）

これは、「日本地政学」の核心が「吉田の会」で行われたであろう具体的政策の研究にあることを示すものであると同時に、それが表7の文章や談話には表れていないことを示している²²⁾。また、『日本地政学宣言』(145)公刊以後の小牧の文章は、「諸新聞諸雑誌の要請に従つて、而も殆んど凡ての場合、題目まで与へられて執筆した」(210)ものであるし、「姉妹篇、講談社版『日本地政学』に於けると同様、本書に於いても、情報局、陸軍防衛課、大本営報道部等に検閲を乞うた結果所論のうち時局の将来に関する部分に於いては相当大部にわたる削除を余儀なくせられてゐる」(213)ようなものなのである。

要するに、ここから次の2点が指摘できよう。「吉田の会」のメンバーが専門知識を生かして行った戦争協力的な活動は表には現れておらず、会の戦争への具体的関与を研究するには、この資料からではなく、別のアプローチを探さねばならないこと。ただし、国民精神昂揚といった社会に直接的な影響力を持ったであろうプロパガンダ活動を、彼らがどういうレトリックを用いて行っていたかはこの資料から読み取れるであろうこと、である。

戦中彼が公表した文章を扱う際は、以上のような点を注意せねばなるまい。

V. おわりに

以上を要約する。筆者は本稿において「小牧実繁著書講演論文目録」（目録α）を紹介し、主にそれに基づき「小牧実繁著作目録」（目録γ）を作成・提示した。そして目録γからうかがえる彼の著述活動の特徴について論述した。また、目録γが彼の思想研究、特に彼の主張した「日本地政学」研究に役立ち得ることを指摘した。そしてその一例として、戦中の部分を利用し、戦中彼が発表した文章について資料批判を行った。

筆者は他にも小牧に関係する資料を把握し

ているが、それについては稿を改めたい。なお、今後筆者は小牧の思想、特に「日本地政学」について研究を進めていきたいと考えているが、本稿はその基盤となるものである。

(京都大学・院)

〔付記〕

小牧実繁宅に保管されている貴重な資料の閲覧に惜しみない協力をしていただいた小牧の御令息平野健男・徑子御夫妻に深甚なる謝意を表する。

〔注〕

- 1) 小牧のことを知ることができる文献として次のものが挙げられる。①小牧実繁先生古稀記念事業委員会編『小牧実繁先生古稀記念論文集：人文地理学の諸問題』，大明堂，1968。②足利健亮「小牧実繁と歴史地理学」(京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』，地人書房，1982)，206～216頁。③「歴史的風土で培われた地理学 — 小牧実繁・織田武雄先生に聞く —」(竹内啓一・正井泰夫編『地理学を学ぶ』，古今書院，1986)，42～74頁。④濱田清吉「小牧実繁先生との御縁」，エリア山口18，1988，40～44頁。⑤米倉二郎「小牧実繁先生の人と学問」，歴史地理学149，1990，1～2頁。⑥角田文衛「小牧実繁先生」(角田文衛編『考古学京都学派』，雄山閣出版，1994)，123～146頁。⑦山野正彦「探検と地政学 — 大戦期における今西錦司と小牧実繁の志向 —」，人文研究51-9，1999，1～32頁。⑧久武哲也「ハワイは小さな満州国 — 日本地政学の系譜 —」，現代思想27-13，1999，196～204頁 & 28-1，2000，60～82頁。
- 2) 前掲1) ⑤159～523頁の「小牧実繁先生著作目録」。
- 3) 本稿で紹介する目録α以外にも、彼の書簡、日記などが保存されている。それらに関しては、稿を改めて紹介したいと考えている。
- 4) なぜ昭和6年からなのかというと、10頁の「ホ著述及び演説」にある昭和6年以降の文献を挙げよという指示に小牧が従ったからである。

なお、「ラジオ新書『大東亜の地政学』』という記述は『地政学上より見たる大東亜』(表7中の(216)，以下番号のみを記す)の誤りであろう。

- 5) 京都府知事蟻川虎三から小牧に宛てた書簡である(1951年8月26日付け)。
- 6) この時代区分は、彼の著述活動の傾向に基づいて行っている。一般的には、日中戦争の始まり、1937年7月を以て戦前・戦中を区分すべきであろうが、本稿では、小牧が初めて地政学的内容の文章(140)を発表した1938年11月を重要視している。なぜなら、地政学研究を行った時期こそ彼にとっての戦中だったからである。また、この区分は、1938年3月教授に就任し、本格的に教室経営に乗り出した彼の個人史的背景をも考慮している。(140)は正に教授に就任した彼の発した所信表明という性格を有するものであった。なお、戦中・戦後は、太平洋戦争終結を以て区分した。この区分は、一般的な区分にも一致するが、彼の個人史的背景を以てしてもこの時点で区分するのが適切である。
- 7) この講演は、1936年12月5日、近畿民俗学会主催の日本民俗学25回連続講習会における講演である。
- 8) ただし、これは飽くまで「日本地政学」という言葉の文献上の初出が(140)であるに過ぎない。彼がいつごろから「日本地政学」を構想していたかという点の究明は今後の課題である。なお、(140)から(141)まで1年2ヶ月もの間、彼は文章を発表していない。その前後に、彼が精力的に文章を発表しているだけに、一見不思議な空白である。しかし、彼はラジオや学会で講演活動を行っていた。その講演内容が(143)や(145)に収録されていることから分かるように、この期間の活動は、(141)以降畳み掛けるように発表される「日本地政学」の内容と深く関係するものだった。また、彼が満州・中華民国へ旅行していることも注目し値する(表4)。
- 9) ただし、彼の行った講演は表5に掲げたものだけにとどまらない。一例を挙げれば、

彼は、大日本興亜同盟の依頼を受け福岡、徳島、広島、大阪などで講演を行っていることが(282)から分かる。

- 10) 同会に関係する小牧の活動の様子は、(227)(233)(250)(268)からうかがえる。特に(250)(268)は、表3の「出馬」した講演会であり、表5とも対応している。
- 11) 大日本言論報国会の理事は、GHQによるC項パージによる公職追放の対象となった。赤澤史朗「大日本言論報国会 — 評論界と思想戦 —」(赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム』、日本経済評論社、1993)、160頁。ただ、小牧がこの理由により、公職追放になったか否かは定かではない。しかし、表6にある彼の記述は、彼がその事実を以て追放されたと受け取っていたことを示すのではなからうか。ここから、地政学研究に従事したことよりも、如何なる社会的地位に就いていたかが公職追放の基準として重視された可能性が示唆される。公職追放の詳細については稿を改めたい。
- 12) 『民俗文化』掲載の小牧の文章の多くは、彼の書き込みによれば(表7)、菅沼晃次郎の草稿に基づいたものと推測される。ただ、誌面からはこの事実は確認し得ない。菅沼は当時、同誌の編集を行っていた人物である。
- 13) 前掲1) ⑥133頁も当時の様子に触れている。
- 14) 岡田俊裕「戦時期地理学史研究と地理学文献目録 — その意義・現状・試行 —」、徳島地理学会論文集4、2000、217~234頁。
- 15) 例えば、①竹内啓一「日本におけるゲオポリティクと地理学」、一橋論叢72-2、1974、13~35頁。②高木彰彦「地政学に関する覚書 — 地政学概念の変遷をめぐって —」、茨城大学教養部紀要25、1993、395~407頁。③Fukushima, Y., "Japanese Geopolitics and Its Background: What is the real legacy of the past?," *Political Geography*, 16, 1997, pp.407-421.
- 16) 従来、「日本地政学」は、戦前・戦中の日本に存在した地政学の一つとして取り上げられており、「日本地政学」にスポットライト

を当て、丹念に事実確認を行ったような研究は見られない。また従来、「日本地政学」は、それを批判すること自体が目的であったというよりは、例えば1970年代においては、自らの持つ政治性に自覚のない同時代の地理学を批判するために、検討が行われてきたように思われる。これは現代地理学のあるべき姿を示そうとする試みであったが、そこには戦後民主主義・平和主義の思想が少なからず影を落としていたように思われる。なお、従来の地政学の検討は、『科学=善、非科学=悪』という二元論的な問題設定で行われてきたようにも思われる。①山崎孝史「ポスト冷戦期における政治地理学の視点 — 新ナショナリズムの台頭と帰属空間の固定化 —」(高木彰彦編『日本の政治地理学』、古今書院、2002)、179頁。②前掲15) ① ③水岡不二雄「現代地理学における『地政学』の復活」*経済119*, 1974, 175~196頁。

- 17) 実際その思いを読み取れる文献が若干ある。例えば、(332)。このことについては稿を改めたい。
- 18) 「吉田の会」は小牧をはじめ京都帝国大学地理学教室教員と卒業生有志が参加し、陸軍からの資金援助を受けて活動していた地政学研究グループである。同会については次の文献を参照した。①前掲1) ⑦11~12頁。②村上次男「日本地政学の末路」、*空間・社会・地理思想*4、1999、50~56頁。
- 19) 室賀信夫「西貢の地政学的位置に就きて」、*空間・社会・地理思想*6、2001、106~112頁。小牧が(160)で「以上の如きが本年六月二十日に於ける吾々の最後の結論であつたのである」と述べていることから、(160)が室賀の研究報告をもとにして執筆されていることは明らかである。他に、室賀信夫「日本地政学と教育」、*東亜文化圏*1-9、1942、79~93頁は(207)に、野間三郎「黒海と地中海の地政学」、*日本教育*7月号、1942、49~53頁は(256)に酷似している。
- 20) 他の著書(194)(210)(213)(276)(282)の序にも同様のことが述べられている。
- 21) 小牧が主張した「日本地政学」が「吉田の

会」のメンバーの思想の融合体であることは、「日本地政学」が如何なるものかを述べた「日本当来の地理学 — 同志の言葉 —」及び「地理学より地政学へ — 日本地政学の主張 —」（(145) 所収）に、室賀信夫、野間三郎他8名が執筆した「皇戦地誌に関する意見」（空間・社会・地理思想 6, 2001, 74～83頁）が、ほとんどそのまま反映されていることから分かる。この (145) 所収の 2 篇の文章は、その後少し手を加えられて、「日本地政学」を説明する際に繰り返して使用されていくことになる。例えば (148) (152) (154) (155)。

- 22) 他の文章で彼は、「日本地政学は常に皇国日本の最重要問題にのみぶつかって行く。濠洲についてもまた同様である。しかしそれ

を研究すると、これを公開のところに発表すると、両者の間には自から儼たる区別がなければならないこともまた当然である。従つて私は今対濠洲戦略の問題には全然触れることを欲しない。」(216), 「何となれば、私は絶対に米英のスパイに利用され度くはないのであるから」(173) と述べている。同様に、具体的政策は公表できないと述べる箇所は数多く見られる（例えば (150) (156)）。また、前掲18) ②52頁の「実際に考察を展開したものは、本となって公刊されたりはしない。政策や戦略は事前に相手に知られてしまつては、何の意味もないのだから、当然のことであろう」という村上の記憶も、小牧の言説を裏付けるものと思われる。

Bibliography of Saneshige Komaki and the characteristic of his writings

SHIBATA Youichi

This paper aims to introduce a bibliography of Saneshige Komaki written by himself, and to reveal the characteristic of his writings based on it. Although Komaki was a pioneer of historical geography in Japan and a well-known advocate of Japanese Geopolitics (Nihon-Chiseigaku) during the World War II, we have not had a sufficient bibliography of him. Therefore examination of his thoughts has been done restrictedly. Hence this paper that presents a lot of materials about him contributes to strict examination of his thoughts, especially regarding Japanese Geopolitics.

Key words: Saneshige Komaki, Bibliography, History of Geography, Writings, Japanese Geopolitics (Nihon-Chiseigaku)